

長谷川明香

Sayaka HASEGAWA

日英語の好まれる言い回し再考：Miyakoshi (2022)  
の批判的検討

Fashions of Speaking in English and Japanese Revisited: A Critical Assessment of  
Miyakoshi (2022)

英語は「する」的言語、日本語は「なる」的言語であるとよく言われる。池上嘉彦氏の一連の研究によって、こうした好まれる言い回し、また、個別言語全体に通底する指向性に関する研究は盛んになり、現在、特に認知言語学において一つの大きな運動を成している。Miyakoshi (2022)は、認知言語学内部の論考ではないが、日英語の2種類の構文(結果構文と受身)の広がりや事態把握の2つのタイプ agent-orientedと experiencer-orientedと関連づけて論じている。また、その事態把握のタイプは、他の構文・言語現象も視野に入れた、日英語それぞれの全体的な指向性として提示されており、上述の認知言語学研究の観点からも注目に値する。

英語は、結果構文において動詞が語彙的に認可しない目的語をとるものにまで拡張する一方で、受身の守備範囲は狭い。日本語は反対で、結果構文は(英語に比べて)限定的にしか使用されず、一方の受身は、英語が許容しない持ち主の受身、間接受身にまで広がる。この違いはどうして生じるのか。本稿は、Miyakoshi (2022)のこうした問題意識とおもな主張を紹介したのち、(i)心理動詞、受身に似た意味をもつ動詞群、(ii)知覚動詞、(iii)移動表現、(iv)語彙的使役、(v)受身に分けて、批判的に検討する。Miyakoshi (2022)が説明として利用する日英語の指向性(英語: agent-oriented、日本語: experiencer-oriented)の概念には、詳細化すべき点が多々あること、取り上げられている個別の言語分析(指向性との関連付けを含む)に問題があることを指摘し、包括的な言語特徴の研究に向けた足掛かりとする。

## 1. はじめに

英語は「する」的言語、日本語は「なる」的言語であるとよく言われる。池上嘉彦氏の『「する」と「なる」の言語学』刊行以来、こうした好まれる言い回しに関する研究が盛んになった。個々の言い回しの選好だけでなく、それらの共通性、ひいては、当該の言語全体に通底する特徴を見出し、それを事態把握の様式の違いと連動させて捉えようという研究は、現在、特に認知言語学において一つの大きな運動を成している。2022年春に発表されたMiyakoshi (2022)は、認知言語学内部の論考ではないが、日英語の2種類の構文の広がりをも事態把握のタイプ(後述するagent-orientedとexperiencer-oriented)と関連付けて論じているという点、また、その事態把握のタイプが、他の構文・言語現象も視野に入れた、日英語それぞれの全体的な指向性として提示されているという点で、上述の認知言語学研究の観点からも注目に値する。本稿は、Miyakoshi (2022)を批判的に検討し、今後の日英語の好まれる言い回しの研究に向けた足掛かりとすることを目的とする。

## 2. Miyakoshi (2022)の問題意識

Miyakoshi (2022)が扱うのは、主に、日英語の結果構文と受身(受動態)である。概して、英語は結果構文の守備範囲が広く、動詞が語彙的に認可しない目的語をとるものにまで拡張する。Miyakoshi (2022)の言い方を借りると、この点で英語はliberalであり、日本語はconservativeである。一方、受身は、日本語のほうがliberalで英語のほうがconservativeである。どうしてこのような広がり方をするのか。Miyakoshi (2022)は、この疑問に対して、英語はagent-orientedであり、日本語はexperiencer-orientedであるために、そのような適用範囲の違いが生じると分析する。このあと順を追って、適宜例を加えながら、Miyakoshi (2022)の論を紹介する。

英語の結果構文の例(1)を見ると、目的語がその動詞が語彙的に認可するもの(すなわちlexical patient<sup>1</sup>)で、かつ、その目的語の変化を文として含意するもの(1a-c)だけでなく、それ以外もこの構文に生じることができる。例文(1d)のkickは、

目的語は動詞が語彙的に取るものではあるが、その目的語の変化を含意しない動詞である(蹴っても敵の位置や状態が変化しないことはある)。また、(1e)のcryは自動詞であり本来目的語をとらないが、(1e)では主語の身体部位であるhis eyesを目的語にとっている(後述するsplit patientタイプの1例である)。(1f)のdrinkは他動詞用法も慣習化しているが、その場合目的語にくるのは飲み物であって、(1f)のような人間ではない。対する日本語(2)は、元来目的語への変化を含意する動詞のみ結果構文に用いることが可能である((2a-c)に例示されるタイプ「AがBを{…く/に}Vする」が日本語の結果構文とされる)。

(1)a. He dyed my hair black.

(Miyakoshi 2022 : 206)

b. She painted the wall white.

c. She broke the vase into pieces.

d. He kicked the opponent unconscious.

(Miyakoshi 2022 : 235)

e. He cried his eyes red.

(Miyakoshi 2022 : 234)

f. He drank me under the table.

(Miyakoshi 2022 : 206)

(2)a. 彼は私の髪を黒く染めた。

(Miyakoshi 2022 : 208)<sup>2</sup>

b. 彼女は壁を白く塗った。

c. 彼女は花瓶をこなごなに割った。

d. \*彼は敵を無意識に蹴った。(「蹴った結果、敵の意識がとんだ」という意味で)

e. \*彼が目を赤く泣いた。

(Miyakoshi 2022 : 234)

f. \*彼は私をペロペロに飲んだ。

(Miyakoshi 2022 : 208)

一方の受身ではどうだろうか。(3)と(4)の対比を見られたい。日本語には、一般的に、受動文の主語が能動文の目的語に対応する「直接受身」タイプ(4a-a')、「持ち主の受身」と呼ばれるタイプ(4b)、「間接受身」<sup>3</sup>、「迷惑受身」「第三者の受身」などと呼ばれるタイプ(4c)があるとされる。受身に「持ち主の受身」「間接受身」がある点が英語とは異なる日本語の特徴であり、中でも「間接受身」は世界的にもめずらしいタイプの受身であるとされる。英語は、日本語の直接受身に対応する(3a-a')しか容認可能ではない<sup>4</sup>。

- (3) a. The vase was broken by him.  
(Miyakoshi 2022 : 207)  
a'. I was hit by him. (Miyakoshi 2022 : 207)  
b. \*I was {hit the face / torn the shirt / hit the child} by him. (Miyakoshi 2022 : 228, 234)  
c. \*I was cried by the child.  
(Miyakoshi 2022 : 207)
- (4) a. 花瓶が彼{によって / に}割られた。  
(Miyakoshi 2022 : 208)  
a'. 私は彼{に / から}殴られた。  
(Miyakoshi 2022 : 208)  
b. 私は彼に {顔を殴られた / シャツを破られた / 子供を殴られた}。  
(cf. Miyakoshi 2022 : 230)  
c. 私は子供に泣かれた。  
(Miyakoshi 2022 : 208)

受動文 (3)–(4) に対応する能動文を (5)–(6) に示す。a から c に進む (ただし a と a' は同じ) につれて、受動文と能動文の関係が間接的になっていくことが確認できる。例文 (6b) における目的語「私の {顔 / シャツ / 子供}」が、(4b) では、主語「私 (は / が)」と目的語「顔 / シャツ / 子供 (を)」に分離しており、後者をヲ格に残したまま前者の「持ち主」だけを主語にしているため、この種のタイプの受身は「持ち主の受身」と呼ばれる<sup>5, 6</sup>。これは後述する split patient タイプに該当する。また、例文 (4c) に対応する能動文では、そもそも「私」は格成分としてもヲ格の一部としても登場していない。

- (5) a. He broke the vase.  
(Miyakoshi 2022 : 207)  
a'. He hit me. (Miyakoshi 2022 : 207)  
b. \*He {hit me the face / tore me the shirt / hit me the child}.

- c. The child cried.  
c'. \*The child cried me.  
(Miyakoshi 2022 : 207)

- (6) a. 私は花瓶を割った。  
a'. 彼は私を殴った。  
b. 彼は私の {顔を殴った / シャツを破った / 子供を殴った}。  
b'. \*彼は私を {顔を殴った / シャツを破った / 子供を殴った}。  
c. 子供は泣いた。  
c'. \*子供は私を泣いた。

上にあげた (1)–(4) の中で、結果構文 (1e) (2e) と持ち主の受身 (3b) (4b) は、動詞がとる主語の行為を受けて変化する対象である patient が、主語と目的語に分離した split patient タイプ (いわゆる外的所有 (external possession) 現象の一種) の例であると言える<sup>7</sup>。また、結果構文 (1f) (2f) と間接受身 (3c) (4c) は、動詞が語彙的に認可する目的語 (の一部) ではないものが、(能動文であれば) 目的語と (受動文であれば) 主語にきている。この要素を、結果構文について指摘した Jackendoff (1990) にならい (lexical patient ではないという意味で) discourse patient と呼ぶ。ここまでの各構文の適用範囲をまとめると以下の表になる (表 1. Miyakoshi 2022 : 209, 234 をもとに作成)。

この 2 種類の構文が (構文は異なるが) 同種の原理で拡張しているのではないかという提案は、Miyakoshi (2022 : 213) も指摘する通りすでにいくつかの先行研究において指摘されているが (例. Nishimura 2003)、Miyakoshi (2022) は、どうして日英語それぞれに異なる構文において、上で示したような、鏡像関係の分布を示すのかという問いに答える必要があると考えた。そして、日英語に見られるこの 2 構文の適用範囲の違いを、英語が agent-oriented (動作主指向的<sup>9</sup>) な言語で、日本語が experiencer-oriented (経験主指向的) な言語で

表 1. 日英語の結果構文と受身における patient の種類<sup>8</sup>

言語 : 構文 のタイプ	英語		日本語	
	結果構文	受身	結果構文	受身
Lexical Patient	(1a): OK	(3a-a'): OK	(2a): OK	(4a-a'): OK
Split Patient	(1e): OK	(3b): *	(2e): *	(4b): OK
Discourse Patient	(1f): OK	(3c): *	(2f): *	(4c): OK

あることから生じるものである(あるいは、この2構文の適用範囲の違いは、両言語のこのような指向性の違いの顕われである)と主張した。単一の構文を複数の言語間で対照するだけでなく、複数の構文を取り上げて、その振る舞いの違いの背後にある、個別言語全体に通底する特性(cf. Sapirのgenius、Whorfのfashions of speaking)を探求する試みであると解することができる。ただ、扱っている構文の少なさのためか、agent-oriented、experiencer-orientedを英語と日本語それぞれの言語全体の特徴として見てよいのかという疑問が残る。また、Miyakoshi(2022)で中心的に扱う結果構文、受身自体の分析に対しても、課題を抱えていると思われる。以下では、宮腰氏の論の問題点および不明点を、順を追って取り上げる。

### 3. Miyakoshi(2022)への疑問点

#### 3.1. 心理動詞、受身に似た意味をもつ動詞群

英語がagent-orientedであるという傾向性は、たとえばMiyakoshi(2022)のあげる心理動詞(psych-verbs)やある種の受身に似た意味をもつ動詞群に見てとれる。よく知られているように、日英語の感情表現方法には(7)(8)に例示するような違いがあり、英語では基本的心理動詞の大多数がagent/causer-orientedで、日本語はすべてがexperiencer-orientedであると述べている(Miyakoshi 2022:227)。感情について、fearや(好悪も感情と呼ぶのであれば)likeのような動詞や、be afraid of、be proud ofのような形容詞表現の場合には、感情主(経験主)が主語に来ることになるが、日英語の違いが出る際には、Miyakoshi(2022)が示す方向での差であることはおそらく間違いないであろう<sup>10</sup>。

(7) {He / The news} surprised me.  
(Miyakoshi 2022 : 227)

(8) 私は {彼 / そのニュース} に驚いた。  
(Miyakoshi 2022 : 227)

また、Miyakoshi(2022:225)は、日本語に「受身的」といえる動詞が複数存在していることもまた、日本語がexperiencer-orientedであることの顕われだと述べた。「つかまる」「見つかる」「教わる」「もらう」がその例だが、中でも「もらう」は、

動作主かつ起点の標示方法など複数の点で、本稿でのちに取り上げる experiencer passives(経験主受動)と共通点の多い特筆すべき要素であるとされる(Miyakoshi 2022 : 225-226)。

これら2つの動詞群は、確かに、Miyakoshi(2022)の言う日英語の好まれる捉え方の違いが顕われた例だと考えることができる一方で<sup>11</sup>、「今回のことで、(私は)大変考えさせられました」というような日本語表現についてはどのように考えたらよいのであろうか。なぜ一度使役化しているのかということ、experiencer-orientedという日本語の特徴からは直接導き出せない現象で、説明が必要であるように思われる。

#### 3.2. 知覚動詞

知覚の動詞についてはMiyakoshi(2022)では取り上げられていないが、心理動詞に関連するものとして見ておいてよいであろう。以下に示す(9)(10)を見比べてみると、英語では知覚者(経験主)が主語に来ているのに対し、対応する日本語では知覚対象が主語に来ている。

(9)a. I (can) see the mountain.

b. I (can) hear the piano.

c. I can taste the brandy in it.

(『ロングマン英和辞典』tasteの項)

(10)a. 山が見える。

b. ピアノ(の音)が聴こえる。

c. ブランデーが入っている味がする。

(『ロングマン英和辞典』tasteの項)

agent-orientedとexperiencer-orientedが逆転しているわけではないが、日本語の経験主指向性の高さの顕われとは言えないのではなかろうか。対象((9a)であればthe mountain)はMiyakoshi(2022:212)の示す意味役割階層において経験主より下にあると解することができるが、(7)のthe newsと(9a)のthe mountainとどこが違うのかという点をより明確にする必要があるであろう<sup>12</sup>。

#### 3.3. 移動表現

Miyakoshi(2022)が英語がagent-orientedであることを補強するために出しているのがいわゆるsatellite-framed構文である。例には使役移動の(11)をあげている。

- (11)a. He pushed the boy down.  
 b. He kicked the ball up.  
 (a-bともにMiyakoshi 2022 : 235)

移動表現の類型論 (cf. Talmy 2000 [1985]) では、英語は経路情報<sup>13</sup>を不変化詞や前置詞で、共イベント (移動様態・原因・手段) を定動詞で表示する傾向があるとされる (自律移動表現の例が (12) (14)、使役移動表現の別の例が (16) である)。一方の日本語の移動表現はどうか。日本語は一般的に、経路情報を定動詞で表示し、共イベントは言語化されないか別の形で表現されると言われている (たとえば、(13) では「あがる」、(14) では「入ってくる (入る、くる)」が経路情報を担う箇所である)。

- (12) The boy ran up the slope.  
 (13) 少年は坂をかけあがった。  
 (14) …when the door opened again and two students in helmets walked in.  
 (村上春樹『ノルウェイの森』英訳)  
 (15) …しているところに、またドアが開いてヘルメットをかぶった学生が二人入ってきた。  
 (村上春樹『ノルウェイの森』原文)  
 (16) The audience laughed the actors off the stage. (Miyakoshi 2022 : 234)  
 (17)a. 彼は少年を押し倒した。 (cf. (11a))  
 b. 彼はボールを蹴り上げた。 (cf. (11b))

Miyakoshi (2022) に、日本語の移動表現は動作主指向性が低い、あるいは、経験主指向性が高いといったことを積極的に述べている箇所は見当たらないが、確かに、日本語では (16) を直接対応させた形では表現できず使役移動表現の範囲が狭い<sup>14</sup>。このことは結果構文の場合と平行しており、その意味で、日本語の使役移動表現は動作主性が低いとは言えるかもしれない。しかし、日本語の別の傾向性である、経路情報が定動詞として現れる点、さらに、特に自律移動において「いく」「くる」という表現が頻繁に用いられる点はどのように説明すればよいのだろうか。日本語の自律移動表現において移動者の行為についての情報は文の中核的要素で表示され、かつ、英語は日本語ほど直示情報を明示しない (古賀2017: 318など) とすると、むしろ移動者の行為に関する表示の数自体は英語より多いかもしれない。日本語のこうした

特徴が、どのような意味で experiencer-oriented (また、動作主性の低さ) につながると言えるのだろうか。宮腰 (2020) に言及のある「主体的事態把握」「内界表出」と関連付けて論じる可能性もあるが、少なくとも、現状ではいわゆる移動表現の類型論で言われているようなタイプ分けが、どのような意味で agent-oriented、experiencer-oriented と関連付けて論じられることなのか疑問が多く残る。

### 3.4. 語彙的使役

動作主性と相関する (はず) の語彙的使役構文 (典型的な例として (18) (19) をあげる) を見てみると、日英語で拡張の方向性および度合いが異なることがわかる。この構文は Miyakoshi (2022) では (その一種である結果構文を除いて) 触れられていない。英語はいわゆる道具主語の用法が日本語よりも確立しているが、たとえばいわゆる「介在性」の中のある範囲 (例. (22) (23), cf. (20) (21)) や、「経験主」が (一見) 主語に来ているのではないかと考えられる用法 (例. (24) (25)) では、日本語のほうが守備範囲が広い。

- (18) John opened the window (because he was hot).  
 (19) ジョンは (暑かったので) 窓を開けた。  
 (20) The Pharaoh built a pyramid.  
 (21) ファラオはピラミッドを建てた。  
 (22) ? I cut my hair at the beauty parlor last week.  
 cf. I got my hair cut at the beauty parlor last week.  
 (23) 先週美容院で、髪を切った。  
 (24) \*/?? We burned all our household goods in an air raid.  
 (25) 私たちは空襲で家財道具をみんな焼いてしまった。

宮腰 (2014) では、(26) の例をとりあげてその主語を「経験主」と述べ、(27) も類例にあげている。

- (26)a. 四郎が身体を壊した。  
 b. 五郎が (床屋で) 髪を切った。(≒ (23))  
 (a-bともに宮腰2014 : 30)  
 (27)a. 一郎が (ドアに手を挟んで) 爪を割った。  
 b. 二郎が (事故で) 足を折った。  
 c. 三郎が (歯科医院で) 虫歯を抜いた。

表2. 日英語の受身の種類(宮腰(2020)およびMiyakoshi(2022)に基づいて作成)

	英語		日本語		
					統語構造 <sup>16</sup>
Lexical Patient (無生物)	(3a): OK	Patient Passive	(4a): OK	Patient Passive	単文
Lexical Patient (有生物)	(3a'): OK	Patient Passive	(4a'): OK	Experiencer Passive	単文
Split Patient (身体部位)	(3b): *	--	(4b): OK	Experiencer Passive	単文
Split Patient (衣服・所持品)	(3b): *	--	(4b): OK	Experiencer Passive	(言及なし)
Split Patient (親族)	(3b): *	--	(4b): OK	Experiencer Passive	複文
Discourse Patient	(3c): *	--	(4c): OK	Experiencer Passive	複文

d. 花子が子どもを亡くした。

(a-dいずれも宮腰2014 : 31)

(23) (25)において、自らに自らの行為(「あえて行なわない」という行為を含む)の結果がかえってきていると考え、その主語に経験主的性格を見出すことはできるが、経験主というだけでは、当該の状況を述べる際になぜ(23) (25)のような語彙的使役構文が選択されるのかという問題の解決にはならない。何らかの動作主性・責任性をも認めなければいけないことは、拙稿を含めた先行研究で指摘されている通りである(西村(1998)、長谷川(2022)など)<sup>15</sup>。

Miyakoshi (2022) の場合、agent-oriented と experiencer-oriented がどのような位置関係にあるのか、1つの名詞句が agent と experiencer の両方の意味役割を担うことが(可能なのだとして)どのような仕組みで可能となるのかをその全体像の中に、改めて示す必要があるのではないだろうか。

### 3.5. 受身

Miyakoshi (2022) では、受身について、本稿第2節で取り上げた以外のことも主張している。受身には experiencer を主語にした受身(experiencer passive)と patient を主語にした受身(patient passive)の2種類があり、日本語にはその2種類が存在するが、英語には後者しか存在しないという主張である。日本語の受身の全体像は宮腰(2020)に詳しい。

受身の例文(3) (4)を再掲し、experiencer passive と patient passive の区別もふまえた表を上を示す。宮腰(2020)は、(4a')タイプの有生物主語の直接受身を、日本語の受身の典型であると考えている。

(3) a. The vase was broken by him.

(Miyakoshi 2022 : 207)

a'. I was hit by him. (Miyakoshi 2022 : 207)

b. \*I was { hit the face / torn the shirt / hit the child } by him. (Miyakoshi 2022 : 228, 234)

c. \*I was cried by the child.

(Miyakoshi 2022 : 207)

(4) a. 花瓶が彼{によって/に}割られた。

(Miyakoshi 2022 : 208)

a'. 私は彼{に/から}殴られた。

(Miyakoshi 2022 : 208)

b. 私は彼に{顔を殴られた/シャツを破られた/子供を殴られた}。

(cf. Miyakoshi 2022 : 230)

c. 私は子供に泣かれた。

(Miyakoshi 2022 : 208)

この主張のうち、統語構造についてもいくらか不明な点があるが、まず疑問に感じられることは lexical patient についてである。英語の lexical patient を主語にした受身が、無生・有生どちらの場合も patient passive となるのに対し、日本語はそうはならないという主張は、どのようにして正当化されるのかという問題である。この考え方をとると、有生物が主語に来ている場合に、日本語と英語で一見対応しているように見えても、まったく異なる種類の受身だということになってしまう。なぜ英語の(3a')タイプの方は experiencer passive と呼ばないのだろうか。日本語の有生物主語の受身にあって英語の対応する受身がない特徴として、たとえば宮腰(2022 : 227-228)には、日本語の有生物主語の直接受身は目的語が表示ができる点(ただし結果としては持ち主の受身になる)、日本語で目的語表示ができるのが基本的に有生物主語の場合に限られる点があげられているが、(3a')と(4a')の差を、「経験主」という意味役割

の付与の違いに連動させて捉えるべきことなのかは、議論の余地がある。

また、lexical patientにせよdiscourse patientにせよ、そもそもどうしてそれらを主語とした受身文が成立しているのか、また、こうした受身文に共通の特徴は(あるとしたら)何なのかという視点が欠けているように思われる。lexical patientおよびsplit patientの受身では、自動詞の能動文と異なり、他動詞文の表わす動作主のpatientへの行為、またそれによってpatientが受ける影響が前提となっている。そして、その結果、patientがどうなったかという観点で当該の事態を述べるのが受身文である。discourse patientの受身で用いられる述語動詞は他動詞に限らないが、対応する能動文の主語による影響がpatientに及んでいると考える余地は十分にある(長谷川・西村2019)。こうした動作主性を背景にもつ受身において、どのような意味でexperiencer-orientedになっていると言うのだろうか。確かに、動作主が主語からいわゆる「降格」し(必須要素ではない)斜格になるという意味で、能動文よりも受動文のほうが文全体の意味合いとして動作主性が低いとは言えるだろう。しかし、その点は、英語の受身も同じである。日本語の受身の広がりを見ると有生物が主語のものが多いのは事実であるが、それが動作主性を前提とした受身という構文とどのような意味でつながり、どのような意味で日本語の受身の方のみをexperiencer-orientedの顕われであると主張するのか(また、その論理はどのような意味で、英語の有生物主語の受身にはあてはまらないのか)について、より詳細に議論する必要がある。

#### 4. まとめに代えて

Miyakoshi (2022)が論を展開する際にその基盤とした日英語全体に通底する指向性の2種(英語はagent-orientedで、日本語はexperiencer-orientedである)がそもそもどういうものなのかというものの議論が不十分なまま、それが説明項として使われていることが問題のもとであるように思われる。知覚を表わす日本語表現において経験主よりも対象のほうが主語に選ばれていること、動作主性と相関するはずの語彙的使役構文(のある種の用法)において日本語の方が拡張の度合いが高いことなどの言語事実を踏まえると、日本語

全体の指向性をexperiencer-orientedであると決めることはまだ早いのではないだろうか。また、(移動表現や)語彙的使役、受身などの言語表現から、動作主性と経験主性が重なりうる場合にどのような意味でその指向性を特徴付けたらよいのか、この2つの指向性は概念的にどのような関係にあると考えればよいのかという問題も生じる。どのような場面・構文においてどのような意味でagent-orientedあるいはexperiencer-orientedという特徴が見られるのかということを明らかにする必要があり、そのような観点から様々な構文を詳細に研究してこそ、日英語それぞれの全体としての傾向性を議論することができるのである。

#### 参考文献

- Bolinger, Dwight (1975) "On the Passive in English," *The First LACUS Forum*, 57-80.
- Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and Form*. Longman Higher Education, New York.
- クラフト, キャサリン・A (2022)『日本人が言えそうで言えない英語表現650』里中哲彦(編訳)、青春出版社。
- 長谷川明香 (2022)「「経験者」という意味役割をめぐって」『東京大学言語学論集』第44号(電子版eTULIP), e1-e14, 東京大学人文社会系研究科・文学部言語学研究室。
- 長谷川明香・西村義樹 (2019)「再帰と受身の有標性」森雄一・西村義樹・長谷川明香(編)『認知言語学を紡ぐ』275-298、くろしお出版。
- 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論—』大修館書店。
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*. Cambridge/Massachusetts: The MIT Press.
- 古賀裕章 (2017)「日英独露語の自律移動表現—対訳コーパスを用いた比較研究—」『移動表現の類型論』303-336、くろしお出版。
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. New York: Oxford University Press.
- 宮腰幸一 (2014)「日本語ヴォイスの統合的・系列的多重構造: 予備的考察」『論叢 現代語・現代文化』12: 1-85、筑波大学。
- 宮腰幸一 (2020)「日本語受動の類型論」『言語研究』157: 113-147。
- Miyakoshi, Koichi (2022) Discourse Patient Paradoxes. *English Linguistics* 38 (2): 203-241.
- 西村義樹 (1998)「第II部 行為者と使役構文」中右実・西村義樹『構文と事象構造』107-203、研究社。
- Nishimura, Yoshiki (2003) Conceptual Overlap in Metonymy. Ukaji, Masatomo, Masayuki Ike-uchi, and Yoshiki Nishimura (eds.) *Current Issues in English Linguistics*. 165-190. Kaitakusha.
- Pinker, Steven (2013 [1989]) *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*. New edition. Cambridge/Massachusetts: The MIT Press.
- 高見健一 (2011)『受身と使役—その意味規則を探る—』開拓社。
- Talmy, Leonard. (2000) *Toward a Cognitive Semantics*, vol. II: *Typology and Process in Conceptual Structuring*. Cambridge/Massachusetts: The MIT Press.

#### 註

- 1 lexical patient (cf. Miyakoshi (2022 : 206))とここで言っている

- のは、その動詞が(能動文において)目的語1つだけ後続させる場合の目的語のことであると考えていただいて差し支えないだろう。すなわち、目的語に結果述語、描写述語、不変化詞が後続する場合を除いて考える。この「語彙的」という考え方は、使用基盤モデルを掲げる認知文法から見ると問題をぼろんぼろ考え方に思われるが、ここでは紙幅の都合上、それを指摘するだけに留める。
- 2 引用元のMiyakoshi (2022)は英語で書かれた論文のため、日本語の例もアルファベット表記だが、本稿では読みやすさのために漢字かな交じりに置き換えて引用する。また、スラッシュ (/)だけで入れ替えを示していたものを、視覚的なわかりやすさの観点から、ほかの記号やスペースを入れながら引用することがある。
  - 3 間接受身という用語を、直接受身と対になる、つまり、持ち主の受身と迷惑受身の両方を含むものとして捉えることも可能であるが、ここではその用語法をとっていない。
  - 4 能動文における前置詞の目的語を主語に出す受身もある(例、This pool has been swum in by several former US presidents and scored of Senators. (高見2011: 117-118))。Bolinger (1975, 1977)、Pinker (2013 [1989])、高見 (2011)、長谷川・西村 (2019)などを参照のこと。
  - 5 「私の顔」「私の子供」のような[人間・動物とその身体部位][人間・動物と、それと親族関係にある人物・動物]なども含めるが、「持ち主と持ち物」に代表させる用語法がとられている。
  - 6 例文 (3b) (5b)に関連して、“He hit me in the face.”を受身にした“I was hit in the face (by him).”は可能である。
  - 7 “He hit me in the face.”のようなタイプ(身体部位所有者上昇構文)は、主語と目的語ではなく、動詞の目的語と前置詞の目的語に分離しているが、同じく外的所有、split patient がかわる現象であると考えられることができる。
  - 8 Miyakoshi (2022: 209, 234)をもとに作成しているが、参照元の表にあげられている別の例については割愛している(Miyakoshi (2022)では、英語の結果構文の discourse patient 欄と、日本語の受身の discourse patient 欄に、それぞれ容認性が低い例文もあげている)。また、日本語の受身の split patient 欄には、「持ち主一顔(身体部位)」「持ち主一服」「持ち主一子供(親族関係)」の3つの例文をあげている(また、本文ではその構造的・階層的差異にも言及している)がここではその詳細には立ち入らない。この点については宮腰 (2020)に詳しい。Miyakoshi (2022)があげていない例文 (1a) (1b)は (1c)と、(2a) (2b)は (2c)と同様の扱いとなる。Miyakoshi (2022)が本文中では言及するものの表にあげていない例文 (1d)とその日本語訳の (2d)はLexical Patient 欄を2行に分けて記載する可能性があるが、定かではない。
  - 9 おおよそ宮腰 (2014)の「使役主/行為主指向」に対応するものだと思うが、ここでは agent-oriented を動作主指向と訳しておく。
  - 10 Pinker (2013 [1989]: 164-166)の認知的曖昧性(cognitive ambiguity)についても参照。please/like, frighten/fear が例にあがっている。
  - 11 「ああ、びっくりした」に対応する英語として“I was really surprised.”よりも“You scared me.”が、「20分待たされた」に対応する英語として“I was kept waiting for 20 minutes.”“I was made to wait for 20 minutes.”よりも“They kept me waiting for 20 minutes.”が好まれるといった、(能動文を基盤とした)受動文と能動文の自然さの違いにかんする指摘も、これとの関連で考えるべきことである(例はクラフト (2022: 110-111, 150-151)より)。なお、池上(1981)では、英語の能動一受動を、「する」的―「なる」的の対比で捉えている。
  - 12 例文 (9)には、他動詞文という典型的には2つのもの間の行為を表わす構文を用い(ただし (9)は進行形にはならないので典型的な行為とは異なる)、また、経験主のほうに動作主に準じた役割を担わせているという点で、単純に経験主が主語になっていると言うだけでは済まない重要な側面がある(cf. Langacker 2008: 371)。(9) (10)が描写する状況では、その知覚情報を得るために必要な身体的状態を保持する((9a-b)であれば見る・聴くことができるように起きている、(9c)であれば飲食物を口に入れておく)ことが主語に求められており、そのためこの場合の経験主には動作主性がいくらか感じられる。英語においてはその点をふまえた構文およびその主語の選択があると行うことができるかもしれない。
- 13 ここで経路情報と呼んでいるものには、直示情報も含まれる。
  - 14 実際 (16)を少し変えて“The audience laughed the actors.”だけにすると非文になる。その意味で the actorsは動詞 laugh にとってdiscourse patient と言える。
  - 15 ただし、筆者の立場でも、(26a)および (27b)などについては、主語の動作主性は相当見出しにくいことは認めざるをえず、こうした例に対する問題意識は長谷川 (2022)に示した。
  - 16 ここにあげる統語構造は宮腰 (2020)に基づいている。宮腰 (2020)に直接の言及はないが、英語の可能な受身についても単文構造を考えていると想定される。また、表に書いた統語構造はあくまでも基本で、そこから外れる場合もある。「私は彼に子供を褒められる」の1つの(もっとも典型的な)解釈に対しては、「私は彼に子供を殴られた」と異なり)身体部位の持ち主の受身と同じ単文構造を想定している(宮腰2020:135)。「殴る」は基本的に〈行為主(彼)〉から〈経験主(私)〉とは別個体の〈受影主(子供)〉への行為としてしか解釈できないのに対して、…「褒める」は〈経験主(私)〉自身への行為…としても解釈できると説明している(宮腰2020: 135)。